

「食べなくても生きられる～胃ろうの功と罪～」を見て

先日、「食べなくても生きられる～胃ろうの功と罪～」の番組を見た。

従来、口経で食事（栄養補給）が困難な障害のある児・者には、経管栄養や中心静脈栄養（いわゆる点滴）があったが、当人に苦痛を伴うだけにその代わりに開発された医療技術である胃に直接栄養を送る経管栄養（胃ろう）は急激に普及している。

胃ろうは従来のものに比べ、胃ろう手術は短時間（約10分）であり、栄養補給の取り扱いも容易なこともあり、当人への負担が少なく生存率が画期的に延びるため、最近では高齢で重度な認知症のために嚥下の能力が衰え、ものを食べられなくなる高齢者にも応用されるようになった。

寝たきりで、いわゆる話しかけに反応のない重度な症状の高齢者に胃ろうを施すのは、「ただ生かすことが本当に患者のための医療か」、「自然な死を迎えられない現状が良いのか」という疑問の声が上がってきている。

その動きの中心にいるのが、胃ろうの技術を日本に広めた第一人者の外科医で、「私には延命至上の現状を招いた責任がある。だからこそ、勇気をもって訴えていかなければならない」と、「どう生き、どう死ぬべきか」の答えを模索するこの医師に密着した番組であった。

番組の中でこの医師は、高齢者への胃ろうによる延命よりも自然の看取りに心懸ける老人ホームの医師と、一方、延命するかしないかの判断基準はあり得ないので胃ろうも必要でないかと考えている老人ホームの医師とも、意見交換していた。

また、高齢の親に胃ろうを選択した家族、胃ろうを避けた家族のそれぞれの想いも取材されていた。

正に、高齢者の延命に関する胃ろうの功と罪についての問題提起の番組であった。

我々として世界最高の長寿国である日本に住む限り、この医師の模索は我々自身の模索でもあろうと思う。

さて、高齢で胃ろうが必要となるような症状になった時、胃ろうを選択するかどうか（どう生き、どう死ぬか）という自らの終末の手段を決めて家族を説得しておかなくてはならないとは、長生きすることは喜ばしいことだけに「長寿」と表記されていたのに、長生きしても、面倒で、しんどい世の中になったといことか…。

医療技術も含め科学技術の発展は人類の幸せに寄与するものであるはずだが、生命現象の摂理に踏み込む科学技術欲は、はたして「人類の幸せに寄与する」と断言できるのかどうか…。